

やまなし文学賞青少年部門佳作

行路 成瀬なつき・作

夜、雨が降っている。俺はベランダに出て、震える手でタバコに火を灯した。振り返ると、まだ照明もつけていない真っ暗な部屋の中に、雨で湿気た段ボール数個とギターケースが五つ。まさしく、夢破れて地元に戻ってきたミュージシャンという風景に、我ながら思わず自嘲の笑みが漏れた。欄干にもたれかかる。

「終わったな」

深夜そば降る雨に金髪が濡れていく。長く吐いた煙は、闇夜の中に滲み消えた。エレキギターで食べていくと、一人で東京に飛び出したのは、十年ほど前の事だ。前にも増して寂れたこの町の様子に、自分もこんな風に朽ちていくしかないのかと思う。漠然とした不安感拭い去れないまま、灰皿にタバコを押し付ける。二本目を出す前に、部屋から青いストラトキャスターを持ち出した。羽織っていたブルゾンのポケットから音叉を出す。ひんやりと冷たい金属を手首に打って鳴らし、ギターにつけるとポーンと心地よくAの音が響いた。弦を弾くと右手が急に強張り、震えた。今まで何万回と繰り返し返したチューニングでさえ、以前のように弾くことはかなわない。何度確認しても絶望するだけと知っていても、俺はまだこれをやめられない。

この奇妙な手の強張りが一過性のものではなく、神経の病気だとわかったのは一カ月ほど前の事だ。最初は左手の小指がやけに引っかかるなと思う程度だった。

「ギターを弾き続けるなら悪化します」

医者からはそう告げられた。だから、やっと手にしたスタジオミュージシャンの仕事を辞めて、この町に帰ってきた。何度も自分に言い聞かせて納得した。それなのに、田舎なら病気でクオリティーが落ちてもまだ通用するんじゃないか、レフティーでいけるんじゃないかという考えを捨てられない自分がいる。思うように弾けないストラトキャスターを抱えたまま、二本目のタバコに火をつける。熱いほどの照明も、群衆のエキサイトしたざわめきも、ミュージシャンたちの笑い声も、煙の匂いが瞼の裏に連れてくる。賑やかさなど欠片もない静かな夜の町に、嫌味たらしく煙を吐いた。

早朝、電話が鳴って起こされる。相手は母親だった。

「あんた、今度こっち帰ってくるのはいつなの？」

「ああ。仕事、辞めた」

「は？　なんでそんな急に。今どこにいるの？」

「昨日こっちに引っ越してきた」

「昨日!?　なんで連絡よこさないのよ！」

「ほっといてくれよ」

「こっちで仕事は？」

「どっかでバイトする」

「いい年なんだから税金と年金はちゃんとしなさいよ？　あと落ち着いたら顔見せなさい！」

「はいはい」

公務員の母親らしい言い分に辟易へきえきしながら、半ば無理やり電話を切る。直置きした布団の上に四肢を投げ出し、転がっていたスーパールのチラシをなんとなく手に取る。端に求人募集の文字を見つけたが、今すぐどうにかしようという気力はない。まだ音楽にすがりたい。

時計は朝の六時を指す。気だるいばかりで、眠りなおすこともままならず、スマホを眺める。ついこの前まで一緒に仕事をしていたような連中から、連絡が来ることはない。一瞬ではるか遠くの人間になってしまった。求人探しにブラウザを開く。検索バーの下に「局所性ジストニア」に関連した検索履歴が並ぶ。治す方法を探していた時の名残を一つずつ、指先で葬った。

「いつそ死んじゃうか」

そんな風に思ったら、皮肉の様に腹が鳴った。

歩いてすぐのコンビニまでは音楽も聴かずに、歩いた。少し前まで騒がしかったセミの声は聞こえない。太陽に向かって咲き誇っていただろうオレンジ色の大きな花が、落ちて踏まれ、道にシミをつくっている。俺にはもう何もないというのに、夏は終わって、秋がやってくる。

無機質な弁当を買って、不愛想なコンビニ店員とひと時のかかわりを持つ。ビニール袋を吊り下げて、またアパートに戻る。郵便ポストに挿さしてある茶封筒を引き取って、エントランスに死んでいる大きなカナブンを跨またいだ。茶封筒には宛名も差出人もない。悪戯いたずらだと思つて、ゴミ箱に放る。電子レンジで弁当を温め、いい匂いが部屋に漂いだすと、急に思考が巡った。茶封筒は間違えて投函されたものかもしれない。慌ててゴミ箱から取り出して、封を開けた。

「私はタコのタエコです。」

深海に暮らしていましたが、相棒を失い、仕方なしに陸に上がりました。

けれど、陸は息がしにくく、歩きにくく、ひとりぼっち、どうしたらよいのか、木陰に隠れてびくびくするしかなかったのです。

そんな時にホタルに会いました。

ホタルはチラチラと光って、私に一人じゃないのだと教えてくれました。

木陰より、タコのタエコ」

子ども騙しだまの童話のような文章だが、それは驚くほどの達筆で、内容とはかけ離れた年齢を感じさせる。タコとホタルの話が何かあったらどうかと、弁当の唐揚げをかじりながら調べてみても、何も見つからない。幾度か読み直してみるが、手紙の内容にも筆跡にも思い当たる節がなく、やはり悪戯だと思って、再びゴミ箱に捨てた。その日は結局、適当に荷物をほどいて、あとは寝て過ごした。

深夜二時になって目が覚める。日中眠りすぎたツケだ。静まり返った夜がまた余計に不安を覆いかぶせてくる。嫌な時間帯に起きてしまったと思いつつ、ベランダに出て、タバコを吸う。煙が肺に入ると、次第に心臓が強く脈打つようになる。心細さはこれで埋まるわけないが、こんな手立てしかない。

「音楽がしたい」

夜風が草木を撫なでる音がして、そっと目を瞑つむる。タバコを持つ左手が強張り、勝手に小指が曲がる。

「ギターが弾きたい」

手癖になったコードフォームも、得意だったフレーズも、頭の中に憎たらしいほど鮮明にあるというのに、強張って勝手に曲がっていく手指では、もう再現できない。左手が震える。闇夜にあてられて、涙がこぼれた。

翌日、昼前に起きた俺はまたコンビニに行こうと部屋を出る。こうやって毎日少しずつ、俺らしくなくなっていくんだと思いつながら階段を降りる。エントランスにはポステイニングをする老婆がいた。

「どうも」

声をかけても振り向きもしない。こんな老人になっていきたくないと思う。通り過ぎた時、視界の端にあの茶封筒が見えた。

「あの、それ俺の部屋っすか？」

白髪混じりの小さな老婆はこちらを向く気配すらなく、俺の部屋のポストに封筒を挿し込む。

「え。ちょっと！」

老婆に近づくと、びっくりしたような顔で振り向かれる。その驚きのように、こちらが面食らった。一瞬見合わせると、老婆は慌てて肩にかけている薄紫色のカバンからメモ帳を取り出した。そこには綺麗な字でこう書いてあった。

「私は耳が聞こえません」

ページがめくられる。

「あなたに何か失礼なことをしてしまいましたか？」

読んだ俺は大袈裟に首を横に振って、身振りを交えて、なるべく大きく口を動かしながらこう言った。

「その茶封筒はあなたのですか？」

老婆は頷く。そして、カバンからペンを出して、メモ帳に何か書き始めた。待つ間の沈黙が気まずい。

「前の家に住んでいます。島タエ子です。あの手紙は私があなたに宛てて書きました」

俺は頷いて、先ほどポストに入れられたばかりの茶封筒を手取る。開けようとするとき、老婆の乾いた手に止められる。また老婆が何かを書くのを待つ。

「よろしければ、うちにいらして下さいませんか？」

メモ帳の文字を読んで、少し考えた。これに応じて、今より不幸になることはないと思っただ。

アパートの南側、道を挟んだ目の前が老婆の家だった。手招きをする彼女に導かれるまま、季節の割に早々と出している居間のこたつに入る。古い木とイグサの懐かしい匂いに思わず深呼吸をした。机の上にはペン立て代わりのジャム瓶と、裏の白い広告を切って作られたメモ帳が積まれている。俺が座った右側には、くたくたになった座椅子と編みかけのレースみたいなものが置かれていた。島さんは日に焼けて色褪せた暖簾の向こうに消えていった。俺はこたつで茶封筒を開ける。今度の手紙も相変わらず達筆だ。

「タコのタエコです。」

今夜もタコはホテルに会いました。

けれどその光はどうしてか悲しそうなのです。

ホタルにもしも悩みがあるのなら、力になってあげたい、一言お礼を言って何かしてあげたい。

タコはそう思って自分の手を眺めるばかりです。

木陰よりタコのタエコ」

島さんは俺の前に温かい緑茶を出し、落雁らくがんと煎餅せんべいの入った菓子かごを置くと、編みかけのレースをどかして座椅子に座った。お茶を一口すすって、俺にも勧めるように湯のみとかごを指す。温かい緑茶は、食道までじんわりと熱くなって、ふうっと思わず息をついた。

「ごめんなさいね、あんな手紙、気味が悪かったでしょう」

そう書いたメモが前に出される。俺もペンを借りてこう書いた。

「あれ、どういう意味ですか？」

島さんは頷きながらペンを走らせる。俺の雑然とした字の隣に美しい文字が並ぶ。外で鳥の声がする。

「タコのタエコは私のことなの」

書かれた文字にオーバーに頷いた。

「それでホタルがあなたね」

どうしてか聞く前に、島さんはまた字を書く。今度は少し長く、ペンが走る音だけの静かな世界になる。慣れてくると沈黙も悪くない。

「夜に見えたあなたのタバコの火が子どもたちのところに見たホタルにそっくりだったの。寂しい夜にホツとしたから思わずあんな手紙を書いてしまった」

島さんはペンを置くと、少し恥ずかしそうに肩をすくめてにっこり笑った。よく見ると、年は取っていてもかわいらしい顔立ちの人だ。俺はメモ帳を新しくして、聞いた。

「どうしてタコなんですか」

また彼女がペンを持つ。

「タコの耳は飾りだから、私とおんなじ」

俺にそれを読ませると、続けて何か書く。

「私は旧姓が高野タエ子。タコのタエコってからかわれていたの」

その文字の隣に可愛らしいタコのイラストを描いて、島さんはまたニコニコした。からかわれた記憶は嫌なものだろうに、それを笑うなんて不思議な人だなと思った。

「どうして、ホタルは悲しいと分かったのですか」

島さんは少し考えるように、首を傾げながら書いた。

「泣いているみたいに、震えていたから」

手の震えがそう見えただんだなと思った。病気の事を書こうかとペンを取る。

「俺は音楽家でした」

途中の文字を覗き込みながら、彼女が頷く。

「病気になって辞めるしなくて、この町に帰ってきて、だから、悲しいってのは」

そこまで書いた時、玄関が勢いよく開く音がした。驚く俺をよそに島さんはメモ帳を覗き込んだままにいる。ザアツと襖ふすまが開け放たれると、学生服の青年が困惑した表情で立っていた。

「え、あ、こんにちは。え？」

黒縁眼鏡で細身の優等生らしい青年はとりあえず挨拶あいさつをしたが、状況は飲み込めないように、俺と島さんを交互に見る。俺が弁明する前に、島さんが手を動かし始めた。

「アパートに越してきた人？」

青年も島さんのように手を動かしながら話し始める。手話というやつだ。二人はそのまま俺を置いてきぼりにして会話を続ける。

「手紙を出した？　なんで？」

「いや、迷惑だつてば」

「だめだよ、寂しいからつて。怖い人かも知れないじゃん」

喋しゃべるのは青年だけで、島さんがどう返事をしているのかはわからない。しばらくすると話にキリが付いたらしく、青年は部屋の隅にカバンを置いて、こたつに入った。

「祖母がすみませんでした。僕は島晴樹です。孫です。お兄さんの格好にびっくりしちゃって、怖い人だなんて、失礼しました」

帰ってきた家に金髪で柄の悪いブルズンを着た男がいたら、それは誰でも怪しいと思うだろう。

「あ、いや、こちらこそ。勝手にお邪魔して、すみません。あの、初めまして、河合啓太です」

俺たち二人がペコペコとお辞儀をしあうと、島さんは席を立って、また暖簾の向こうに行ってしまう。

「祖母は知能が幼い部分があって、興味の惹かれることは何でもしてしまうんです。去年、祖父を亡くしてからは寂しいのか拍車がかかって、近所の人たちにご迷惑を」

彼は煎餅を手で割りながら話す。

「河合さんはこちらが地元なんですね」

「あ。はい」

「前はどちらに？」

「えっと、東京っすね」

「仕事で行かれていたんですか？」

「まあ、はい」

恐ろしくコミュニケーション能力の高い孫に圧倒されていると、タエ子さんがお茶を持つて戻ってきた。

「この人ね、か・わ・い・け・い・た　さん」

手を一文字ずつ動かして、青年は俺の名前をタエ子さんに伝える。彼女は席について、メモ帳を自分のところに引き寄せる。一言分くらいをサラッと書いて見せる。

「ホタルじゃなかったのね」

その下に返事を書いた。晴樹くんが落雁に手を伸ばす。

「ホタルって呼んでもいいですよ」

俺の書いた文字を読むとタエ子さんは子供みたいにほほえに微笑んだ。

「お昼はなにかある？」

彼女は続いてそう書いた。向かいの晴樹くんはもう四枚目の煎餅を食べている。俺は首を横に振る。

「食べてって」

そう書くと、タエ子さんはまたこたつを出た。

「好きなんです。ご飯ふるまうのが」

煎餅を噛み砕く隙間から、晴樹くんが話しかけてくる。ふと彼の手元を見ると、楽譜が広がっていた。

「楽譜、読めるんすね」

「あ、僕、高校でマンドリン部なんです」

クシャリとほほ笑んだ彼はどことなくタエ子さんに似ている。

「二本ずつ弦がある楽器っすよね」

「そうです！　ご存じなんですネ。音楽されるんですか？」

「エレキギターなんすけど、まあ、それで食ってて」

「え、すごい！」

真っすぐのきらきらした目を向けられたら、なんだか急に申し訳なくなつて、自然と病氣

の名前を口にしていた。

「でも、局所性ジストニアって病気なんすよ」

目の前の湯呑ゆのみに視線を落とす。

「神経の病氣。勝手に指が固まって、曲がって、震えて。ギターだけが、本当にそれだけができなくて。普段は痛くも痒かゆくもないってのに。呪かゆいみたいなんすよ」

さっき会ったばかりの学生に俺はなにを話しているんだろうと思いつながら、湯呑の中の揺らぐ茶葉を見ていた。そうか、タエ子さんと同じように寂しかったんだと気が付いた。彼は冷笑した俺をじっと見つめて言った。

「祖母がよく言うんですけど。大丈夫です。生きてて無駄なことなんてないです。いつか今日の日のことを懐かしいと笑う日が来ます」

彼は神妙そうに煎餅の空袋を折りたたみ、黙って楽譜に視線を戻した。

「そうか、そうっすね」

そんなふうには思ったら、自分らしさが消えていくのを認めることになる。俺には到底、そんな日は来ないでほしいと思う。暖簾の向こうから、こちらの気まずい空気を知らないタエ子さんが平たいお皿を持ってきた。

「おー、生姜焼き」

そう言って、彼は立ち上がり、机の上を手早く片づけ、箸はしとご飯を並べる。タエ子さんは何往復かして、机の上に人数分の生姜焼きと漬け物と味噌汁を並べた。

「どうぞ」

席につくとすぐに、そう書いたメモを見せた。

「いただきます」

生姜焼きはシンプルで、甘じょっぱくて、素朴な味がした。

「おいしい」

思わずそう呟つぶやいて、タエ子さんに伝えるためにペンを探す。

「こうして」

晴樹くんが頬を撫なでる動作をした。真似てやってみると、タエ子さんがパアツと笑顔になって、胸の前で手を動かす。

「嬉しいって言ってます」

笑顔のタエ子さんにつられて微笑んだ。続けて味噌汁と、漬け物を食べる。食卓のものは正直、全部少し薄い。けれど、口に入れるたびになぜか安心した。そして、きゅうりは青臭いということも、大根は辛いということも、生姜は香り高いということも、コメは少し甘い

ということも、忘れていたんだと気が付く。鼻の奥が急に熱くなった。思えば高校卒業から都会のコンクリートジャングルで、必死にギターを弾いていた。狭い地下室の、小さなステージ一つのために、食べるのも寝るのも惜しんで、誰かに認められようと生きていた。気を抜けばすぐに才能のある人たちに振り落とされる音楽の世界にしがみついていた。今はもうそれができない。でも、初めてそれがいいんだと思った。

「浅漬けの大根、辛いですか？」

箸を止めたことに気が付いた晴樹くんは声をかけられる。

「いや、うまいっす、全部」

「薄くないですか？」

「それがいいんすよ」

「こればっかだと、たまにどうしてもハンバーガーとか食べたくなりますけどね」

彼が笑う。タエ子さんは首を傾げ、彼が話の流れを手話で伝える。応酬が続いて、最後にタエ子さんが気取ったような顔をした。

「懐かしく思える日が来るって教えてくれたけど」

「え、はい」

「さっき言われたときは、そんなの俺が俺じゃなくなる気がしたんすけど。そういうことじゃないっすね、きつと」

「そう、なんですかね」

彼は困ったように答えた。外から、子どもの話し声が聞こえてきて、遠ざかっていく。静かな食卓だが、不思議と寂しさはない。

食事を終えると、晴樹くんが洗い物を始めた。俺はタエ子さんにお礼を書いた。

「おいしいごはん、ありがとうございました」

「いえいえ、またいらして」

「またきます」

立ち上がって、暖簾の向こうの晴樹くん「じゃ、また」と声をかける。「はい」と返事がある。タエ子さんは先に歩き出す。上着のポケットに手を突っ込んだら、音叉に手が触れた。俺はそれを、開きっぱなしになっている晴樹くんのカバンに置く。中の荷物の隙間を滑り落ち、音叉はすぐに奥に沈んで見えなくなった。襖が開くと、どこからか風がそよ吹いてくる。靴を履いて、タエ子さんに深く頭を下げ、その家を出た。彼女は俺が角を曲がるまで、ニコニコと手を振っていた。

見上げた空は秋晴れ。木々は薄く色づき、金木犀きんもくせいがほのかに香る。この町で俺はまた、何かを忘れて、何かに出遇あうのだらう。(了)